

コレアン・レディはドラマより熱し！！

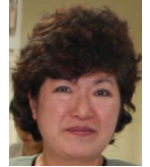
2006.9.30 北海道 里親 中兼正次



韓国では、第二次世界大戦、朝鮮戦争の後も、朴大統領などによる強権政治が続いた。1980年には、デモ隊を軍隊が鎮圧し、女子大生が乳房を切り落とされるなどして多くの死傷者を出した光州事件が起こるなど、暗い時代が続いた。金大中氏が大統領に就任する1998年まで、政治的には、戦争直後の混乱状態にあったとも言える。私も大統領官邸（通称青瓦台）の写真を撮ろうとして、パスガイドに制止された。

今は美しいソウルタワーがある南山（ナムサン）の中腹に、朴大統領当時からつい最近まで、韓国中央情報部KCIAの本部があり、「ナムサン」と呼ばれていた。恐怖の的の建物を改修し、世界の若者が集う場として改修したのが、今回の会場、**国際ソウルユースホステル（写真左）**である。初のアジア里親大会は、韓国の平和な未来を願う象徴となった。

1997年、韓国に深刻な経済危機が起こり、捨て子が相次いだ。1995年から個人的に里子養育事業（家庭委託）を推進していた**パク・ユンソク女史（写真右）**は、「要保護児童には施設ではなく家庭委託を！」と、マスコミを通じて繰り返し訴えた。それ以前の韓国の里子養育は、戦争孤児や米兵と外国人労働者の間の子ども、ストリートチルドレンなどを欧米に国際養子に出す前の、短期間のものが主だった。「**韓国里子養育父母協会 KFCA**」は、1998年、社団法人に認可された。



当然、養護施設関係者と政府からの反発は強かったが、彼女はそれを押し返し、マスコミに露出し続けた。そのうち国民の理解が広がり、無視できなくなったため、政府は2003年から、里子養育（家庭委託）事業を正式な制度とした。2002～2003年にかけて17カ所の地域家庭委託センターが設置された。2005年には中央家庭委託センターをソウルに設置した。所長は女性牧師のキム・ジースン博士。里子の措置決定と事後指導は、地区ごとに、KFCAなどいくつかの民間団体に委託した。体制的、財政的には、日本よりまだまだ不十分の感がある韓国だが、スタートダッシュには勢いがあった。



パク前会長が在ソウルのオーストラリア大使館渉外部長になったことを契機に、現在の**カン・スンウォン教授（写真左、韓信大学教育学大学院長）**に交代したのは昨2005年5月。押しの強い前会長と違い、手堅く進めるタイプ。

KFCA 事務所（写真右下）は、4階建てのビル一棟である。その中には、約50人（？）の宿泊が可能という研修所機能も備えている。そのビルは製薬会社からの寄付だということだけでも、国民の理解の深さが分かる。

今大会の開催費用は、政府の助成、外国人も含めて一人当たり20ドルの参加費（3泊食事付き）もちろんだが、過半は製薬会社、ベビー・子供用品などの、民間企業からの寄付金であった。

KFCA本部の事務局体制は、わずか4人。私が英文メールで交渉した相手には、若い女性ボランティアを想像していたが、お会いしてみると50代後半と思いき**イェオンKFCA国際部長（写真左下）**。彼女は若い頃から、英語版の聖書を独学で読んでいたが、40歳ごろ一念発起。アメリカ人の英語のミサに出席し続け、今ではペラペラである。ユネスコ、ユニセフ、KCIAの3足のわらじで働いている。KFCAの仕事は週2回だけとのこと、メールの返事が遅いはずである。

この3カ月間に、「開会式の場所はどこか」というメールだけでも、7～8回発したが、その場所をようやく伝えてきたのは、わずか1週間前であった。1ヶ月前に送られてきた日程表に、「前夜に夕食会」とあり、彼女のメールにも「日本人も招待」とあったのだが、実際行ってみると、夕食会などどこにもなく、その後が不安になった。あとで聞くと、夕食会は実行委員会役員だけのもので、勘違いでごめんなさい、とのことだった。手が回っていない！ KFCA事務局長のキム・チョンソンさんと、11人のボランティア女子大生を含め、以上ご紹介した女性達は、全員英語が流ちょうであった。

彼女らは、いったんやろうと決めたら、計画が穴だらけではあるものの（失礼）、とにかくやり通してしまった。全員参加の夕食会はなかったが、おかげで市内観光ができた。出来映えは私の採点で80点、十分である。日本だったら、完璧な準備と運営ができなければ、日本人の中から強い非難を浴びるので、なかなか行動に移れない面がある。アメリカでの世界里親大会、メキシコでの障がい者の国際会議にも出たことがあるが、日本人なら怒鳴って抗議するようなどんでもない運営にぶつかっても、誰も大きな声で不満を言うでもなく、駆け回る事務局員もいない。みな、とりあえず「開いている分科会」におとなしく参加していた。完璧を要求するのは日本人だけらしい。国際会議で精密機械を作るのと同じような発想を持っては、なかなか進めない。

日本の制度をまねたのかもしれないが、昨年の日韓里親セミナーの後、韓国でも里子傷害保険を導入したという。外国の良いところをどんどん吸収している。50年以上の歴史を持つ日本の里親制度は、欧米とは違ったアジア的視点で作られており、アジア諸国にとっては、応用しやすい面もあるものと推定される。それらを伝え、アジアの里子養育を振興し、逆に日本がエネルギーをもらえば良いと思う。

私と妻は、昨年8月、アメリカでの世界里親大会で、パク前会長と、5月に就任したばかりのカン会長らにお会いした。その縁で、昨年11月、ソウルでの日韓里親セミナーに参加した。今年8月には韓国テグ市に、津崎教授と関西の里親さん3人がホームステイに出かけた。そして今回のアジア大会。韓国が投じた一石が、アジアにどう広がり、日本がどう応えるか、みんなで考えて行きたいものである。

韓国里子養育父母協会KFCAは、歴史が短いため、欧米、豪州の例をそっくりまねて、里子養育について考える学者、社会福祉士、行政担当者などに里親が加わった、里子養育推進のための会である。子どもが欲しい大人のためではなく、良い家庭に恵まれない子どもに代替家庭を用意するための、あくまでも子どものための会である。

里親制度が発達した先進国の中で、（行政の後押しを得ながらの）里親自らの研修と親睦を主な目的とした、里親だけからなる会が中心になっているのは、おそらく日本だけである。今回の大会でも、昨年の世界里親大会でも、里親の発表は少なく、里親や里子を取り巻く関係者が里親という人的資源をどう活用するかについて研究する、「学会」の様相を呈していた。日本で開くなら、里親の体験発表や、里子の作文コンクールなどを、もっと取り入れると良い。

日本ではこの分野の研究者が少ない。また、里子の措置権限の問題があるので、里親から児童相談所へはなかなか意見が言いにくい。国や県に対する「要望」はできても、対等の立場での「提言」や、マスコミに顔を出して「主張」することは難しい。日本も「里親会 Foster Parent Association」から「里子養育協会 Foster Care Association」に改組する必要があるのではないかなと思われる。特に、垢すりで一層美しく若返った大和撫子の皆さんには、コレアン・レディに負けないよう、奮起を期待する。もちろん日本男児も後を追う（かもしれない？）ので。えっ、ここに書いてあることは、どこまで本当だって？ そんなこと、答えられませんよ。書いている本人が分からないのだから。

